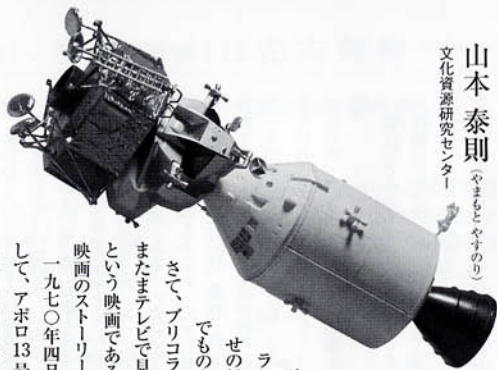


ブリコラージュと『アポロ13』

山本泰則 やまもと やすのり
文化資源研究センター



い

ま民博で開催されている特別展「きのうよりワクワクしてきた。」のキーワードは「ブリコラージュ」である。これはフランス語で、身の回りのありあわせの材料や道具を使って、自分の手でものを作ることを意味する。

さて、ブリコラージュで思いだすが、去年たまたまテレビで見た「アポロ13（サートーン）」という映画である。実話をもとに作られたこの映画のストーリーを簡単に紹介しよう。

一九七〇年四月、人類三度目の月着陸をめざして、アポロ13号は順調に飛行を続けていた。しかし、月まであと少しというところで、突然何かの爆発音とともに激しい振動に見舞われた。アポロ宇宙船は、司令船・機械船・月着陸船という三つの部分でできているが、機械船の液体酸素タンクのひとつが破裂したのである。このままでは三人の宇宙飛行士たちは死んでしまう。地上からの指示で彼らは急速司令船の機能をすべて停止して、月着陸船へと避難した。

月着陸を中止して、なんとか地球までたどりつけるかにもえたアポロ13号に、新たな問題が発生した。月着陸船で二酸化炭素濃度の異常を示す黄色いランプが点灯したのである。密室

の宇宙船内では、人がはきたす二酸化炭素はフィルターで吸収する。本来二人乗りの月着陸船に三人が長時間乗りこんだため、予想以上に早くフィルターの容量を超えてしまったのだ。司令船で使っている四角いフィルターは、月着陸船の丸いものとは形が合わず使えない。

この問題に対処するため、NASA（米航空宇宙局）の地上スタッフは宇宙船に積みこんであるのとまったく同じあらゆるものをテーブルの上に広げ、解決策を考えはじめた。そしてついに、司令船用の水酸化リチウム入りのケースに粘着テープ、廃棄物の袋、宇宙服のホース、飛行計画書の表紙、それにソックスを組みあわせて、月着陸船で使える、二酸化炭素吸着フィルターを作りました。これは、まさに

と

ここでこのシーンの少し前に、こんなやりとりがある。アポロ13号を地球帰還軌道に乗せるため、故障しているかもしれない機械船のメインエンジンの代わりに、月着陸船のエンジンを噴射するとい

う案を地上スタッフは考えた。

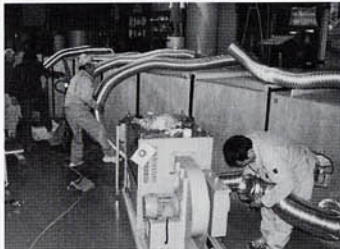
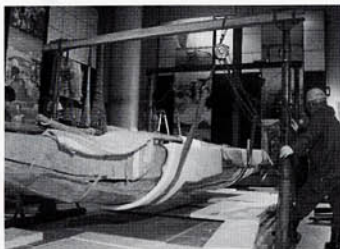
「何の保証もできません。月着陸船は月に着陸するために設計されているので」

意見を求められたクラマン社の技術者は答えた。それに対して、飛行実施責任者のジーン・クランツが言ったことはこうだ。

「何のために作られたかなんて、この際どうでもいい。何のために使えるかが問題なんだ」

これこそ、ブリコラージュの精神を言いあてているのではなからうか。

地上スタッフと宇宙飛行士たちの必死の努力の結果、三人は奇跡的に無事地球に帰還することができた。ハイテク技術の粋をあつめた宇宙船の中でさえ、生死にかかわる予想もできない事態から飛行士たちを救ったのは、ローテクなブリコラージュの方法だった。既存の知識や技術の体系を越えて未知の領域に踏みこんだとき、ふと顔をだすのは、人間が昔からもちつけているこんな「野生の思考」なのかもしれない。



2003年3月、民博の南アジア展示場でおこなわれた大型木製資料（漁船）の加温殺虫処理実験。スキー場の温風乾燥機を組みこんだ世界初のこの装置もブリコラージュ？（写真：園田直子）